チベット・アムド地域における土族住居の空間構成の意味と変容について

―青海省黄南チベット族自治州同仁県ゴマル村を事例として ―

宋　萍

１はじめに

1-1 研究背景と目的

青海省同仁県はチベット高原東北のアムド地域[注1)]の中心地である。唐時代から多民族の辺境部落や国境の紛争地であり、明時代には五つの駐屯地が置かれ（後に五つの土族集落になった）、そのうちはゴマル村の前身である。古城から集落を開拓し住み着いた。また、2007 年に青海省で最初に中国歴史文化名村に認定され、近年では経済発展と観光化政策により、政府による改修事業が進みつつある。土族は青海省に集住し、チベット族、モンゴル族や漢族からの影響を受け、1950 年代に政府から認定された民族である。宗教的にはチベット仏教と土着神を信仰しており、母語は中世モンゴル語に由来する。仏教復興運動、周辺のチベット族との通婚などの要因により、村民自身はチベット族としての民族的アイデンティティが強く、生活様式も同じ地域のチベット族と大差がない。

土族住居に関する既往研究では青海省東部の民和県と互助県の土族を対象として、集落の社会構造、集落の作り方と自然環境の関係、建築の形態、建築技術に着目したものがあるが、チベット・アムド地域における土族住居の空間構成の意味と変容についてものは少ない。

本研究では軍事文化と宗教的信仰の影響で形成したゴマル村の住居の現状を記録し、土族住居の伝統的な空間構成の意味を明らかにする。そして、近年、使われ方が変化しつつある。その変容の背景と原因について考察することを研究の目的とする。今後の歴史文化名村の開発計画に資する知見を得ることが重要だと考えられる。

1-2 研究方法

青海省同仁県ゴマル村古城の 105 軒中の保存状況が良好な 22 軒を調査対象とした。2020 年 7 月と 9 月に実測を行い、民家の形態や空間構成の特徴を抽出した。ヒアリング調査により、年中行事や人生儀礼のやり方、各空間におて生活の様子を記録した。その後、住居の規模の変化によるその変容の背景と原因に着目し、住まい方と空間構成の変化を分析した。

１-3 研究地域概要

ゴマル村は大陸性高原半乾燥気候に属し、冬が長くて寒く、夏は短くて涼しい、年平均気温 5.2℃で、年平均降水量は 419.2㎜ を記録する、一日の温度差が激しい地域である。総人口は2132 人（2016 年）程度で、一軒家には主に 3、4 世代で平均 7.82 人が生活している。男性は分家や寺院でラマ（仏教僧）になる習慣がある。2007 年から主な収入源が農業から手工業、レプコン芸術[注2)]、自営業と出稼ぎとなっている。古城は版築で作れられた土壁で囲まれており、東西は 220 m、南北は 180 m、高さは 11 mである。小川を隔てた村の高所にチベット仏教に属するゴマル寺院が建てられた。

2 民家の概要と空間構成

2-1 民家の概要

現在の古城での住居は 700 年前後（明時代）に建設された。先住民の後裔と、売買で手に入れた住民が存在している。住居はほとんど二階建て、迷路ように狭い道に面して建てられた。構造は、3 m以上の版築土壁を外壁として、内部は木造である。中庭「インーズ」[注3)] を囲む各部屋は母屋、寝室「タ」と付属部屋で構成された。多くの大門「ギダンダン」は山神の方（東と南方）に面する。母屋の外側には付け足すように設置されているサンルーム「フェンビ」が多く見られる。中庭の一隅或は二階に，杜松の枝や小麦粉などを焚く神に献納する香炉「サンゴン」がある。正門の頂点にタルチョ（五色の布に仏教の経文を印刷した旗）がおかれている。

2-2 住居の空間構成

2-2-1 母屋

母屋は全体的な配置において重要な要素とする。北側に配置され、ほとんどが二階建てである。一階には「マハン」を中心にし、左右に家畜小屋「グオーグン」（近年家畜を飼わないためなくなった）、食料庫「ダルズ」が設置された。二階は、仏間「チョシガン」とそれにつながる客室「ジュンカン」、収納「ルーズ」である。かつての半外部空間だった廊下「チェンムカ」は近年サンルームが設置され、内部空間になった。ま

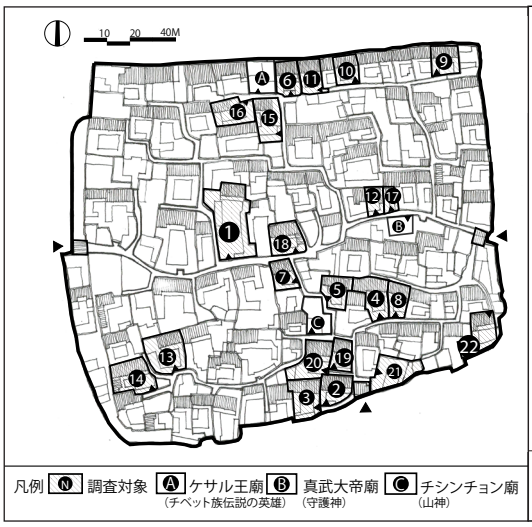

図 1 ゴマル村の古城の平面図

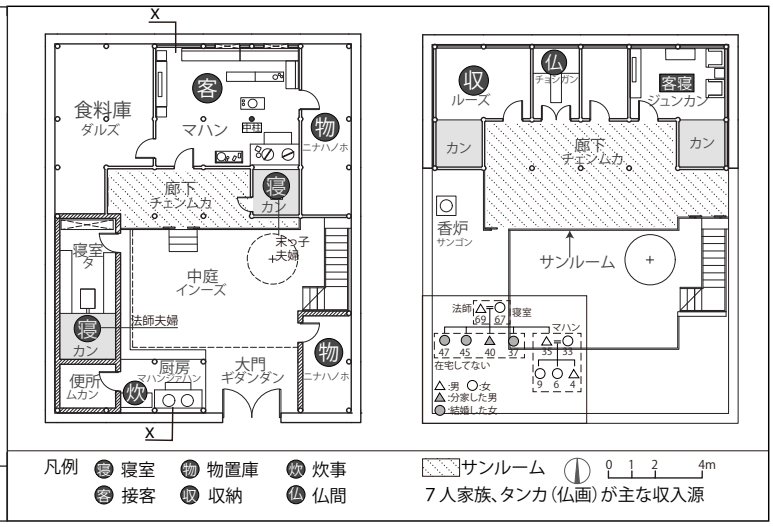

図 2 調査住居 10 号平面図

た、中庭から二階にあがる階段「コグオシー」がある。

マハンは一番広い木造部屋であり、接客家具とカマド付きの広いカンを持つのが特徴である。カンとは部屋の一部を 650 ～ 700mm 高くし、その下にカマドで調理した後の煙を通すことで部屋を暖める暖房装置である。日常的には、カンの上で食事、就寝、接客、団欒が行われ、ソファーやテーブルは来客のため設置していたが、通常は家族メンバーが利用している。非日常的には、結婚式、剃髪式、誕生儀礼、竈神祭などのな儀式が行われる場所としている。住居の改修と増築に関わらず、マハンの様式は昔から受け継がれている。近年では日常的には使われない傾向がある。

チベット仏教は土族の生活において重要視されている。仏間は仏教の開祖である釈迦、観世音、位の高い活仏を祀る空間である。住居の意匠性において装飾性が高く、最もお金がかかる。外来者は仏間に入れなく、そして隣接部屋は日常的に使うことは少ない。日常生活において、毎朝の焚香及び金属製杯に水を入れて神に献納し、特に年輩者は一日で仏間前に経筒[注 4)] を時計回りに回転している。非日常的生活において、春節の朝に家族全員は仏間前に拝礼し、年輩者はパンを持ちながら焼香する。葬儀を始める前に、僧侶を招いて仏間に転生儀礼を行い、死後 7 日間、客室で親族や村人が念仏を唱える。

土族の宗教的活動に関しては、自然崇拝などの民間信仰よりチベット仏教は的色彩が濃くなっており、チベット仏教は最も大切な信仰であると考えられる。表 1 により民間信仰とチベット仏教に関する儀式が行われる場所はマハンと仏間に分ける。母屋には、チベット仏教の信仰によって意味づけられる仏間と日常的生活によって意味づけられるマハンがあり、「信仰中心」と「生活中心」に分けられる。

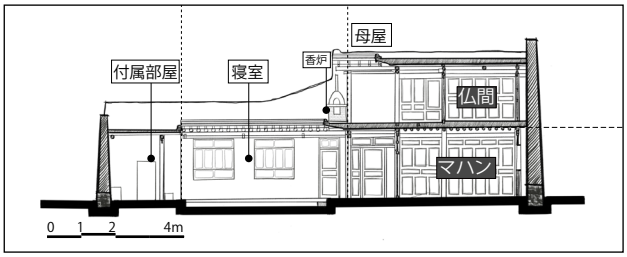

図 3 調査住居 10 号 X-X 断面図

表 1 母屋で行われる年中行事と人生儀礼

	里帰り祭 (ロバゴタン)	竈神祭 (ゾウネネ)	誕生儀礼	剃髪式	結婚式	春節 (ロサル)	葬儀	積徳儀礼
時期	旧暦 12/8	旧暦 12/24	誕生から一ヶ月	生後最初 4 月 11 日	大晦日	旧暦 1/1-15	死後 3 日以内	9-11 月
宗教的要素	民間信仰 *	民間信仰	民間と仏教	民間と仏教	民間と仏教	民間と仏教	民間と仏教	仏教
参加者	家族	家族	親族	家族	親族	家族	村民	村民
場所	マハン		マハンと仏間					仏間

* 民間信仰は山神、土地神、竈神、家の守り神などの土着神への信仰

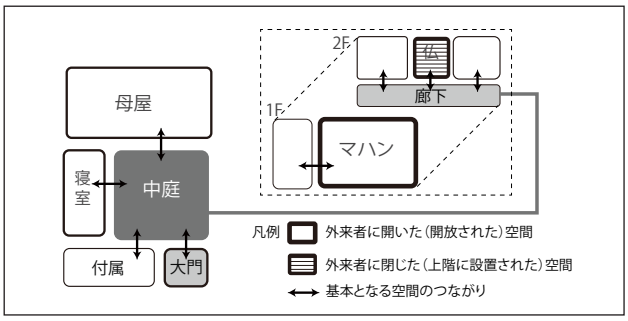

図 4 空間構成をつくりだしているモデル図

2-2-2 寝室

寝室はカンを持つ就寝の場であり、世代を分けるため、北側以外に設置される。子供が 15 歳以上になると親と場を分けてここで眠る。構造は木造、壁は木壁、煉瓦壁、煉瓦壁タイル保護の三つのタイプがある。22 戸の調査住居には西側寝室「ネタ」が 19 軒、東側寝室「ヘシータ」が 8 軒で、両側に設置されたのが 7 軒で、南側寝室「ホンタ」が 7 軒に見られた。

2-2-3 付属部屋

附属部屋はトイレ、便所「ムカン」、厨房「ジァハ

ン」、牛糞や薪などの燃料を置く小屋「オンルアー」、物置庫「ニナハノホ」なとで構成されていた。元々は厨房「ジァハン」という独立した空間はなく、一般的にマハンのカマドで、夏になると中庭設置されたカマドで炊事していた。

3 民家の歴史的発展とその原因

従来の住居は母屋と付属部屋を基本的な空間要素として構成されたと考えられる。母屋は北側に位置し、平面構成の秩序としては上位でおり、家族全員がマハンで炊事、食事、接客、団欒、就寝していた。図 5 は住居の規模の変化と基本的な生活行為炊事、接客、食事、就寝との関係を示す。

1980 年代以降「改革開放」政策の影響を受け、収入と人口の増加と共に、煉瓦が新材料として普及し、改修と増築が始まった。敷地が限られている場合に、寝室は若い世代の就寝のみの場所として使われていた。

2000 年以降「西部大開発」政策が実施され、急速な経済発展と観光地化により近代化された設備が取り込まれた。寝室には接客するため家具や新型ストーブが導入された。マハンは昼間でも電気をつける必要があり、夏にはカンの暖房機能を止める。昔より住まいの快適性への重視されたため、年輩者は夏の間、マハンからより小さな寝室に移動していたと考えられる。その後、新たな炊事空間が独立し、クッキングヒーターなどの新型炊具を使い、炊事の機能は完全にマハンから厨房に移行された。マハンのカマドはほとんど使われないから、年輩者は次第に寝室に移動した。それ以降、寝室は日常的にマハンより利用頻度が高くになっている。

2007 年から政府はレプコン芸術文化をアピールし、農業から手工業などの第三産業へ変化し、出稼ぎ村民が増加した。また、2010 年から政府の補助事業が実施され、経済的に余裕ではない家庭を対象に、古城外に画一的な住居が建てられた。現在は人口が減っており、隣の民家或は一部を購入して 1 軒に改造した住居が増えている。

民家の歴史的発展をまとめると、1980 年代以後、新築・建てかえが集中して行われ、居住面は拡大している。経済と人口の移動は住居の変容に大きく影響を与えている。生活中心はマハンから寝室に変わっていると考えられる。

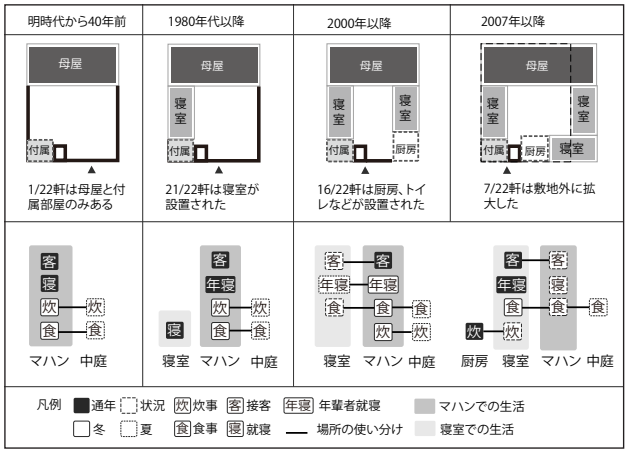

図 5 住居の規模と使い方の変容

4 マハンの平面構成と変容

4-1 マハンの伝統的平面構成

マハンはいくつかの領域に分けて認識されている。中央には他の柱より太い、中柱「ジガ」がある。土族は粉食を主食としているため、「レンバン」には大きな板場を置き、小麦粉をこねてパンやめん類などを作る。昔は各家の水道設備が建設されておらず、女たちは毎日井戸から水を運び、水瓶を貯蔵した。水を扱う場はマハンの戸の後ろに設置された。カンは就寝する場所として使われているが、カンの上で座卓を置き、食事、接客、団欒などの日常生活も行われる。木床上に羊毛フェルトを敷いて座卓を置き､床座で主に食事、接客、会話をする。マハンには中柱やカマドなどの設えに重要な意味が昔ながらに残っている。(表 2)

22 軒の事例について、カンの位置や室内の設えによるマハンの平面構成を 3 つのグループに分類した。ヒアリング調査により、グループ A は村の中で最も古い。グループ A とグループ B は私的なスペースと公的スペースが混同している。グループ C はプライバシー意識の高まりから、木壁で間仕切りが設置された。

4-2 マハンの変容

近代化により各家に水道設備が建設され、水を扱う場はなくなった。接客のための羊毛フェルトと座卓の代わりにソファーやテーブルが導入された。22 軒の

表 2 マハンでの重要な設えの意味

中柱ジガ	構造的意味	他の柱より太く、上には主梁がかけられる。中央にある方が構法的にはより自然な形態と考えることができる。
	象徴的意味	1、家の護り神（家神） 木造部分（主体）をつくる前に、中柱を最初に立てて儀礼を行う。昔は遊牧民族として、テントを支える中央に設置された柱から残る意味もあるではないかと考える。
		2、男性を象徴する 当村では男性が主に家の生計を支える。 結婚する時女性の家では祖父と父親がカンの上に座って、娘が中柱をゆっくりと 3 回時計回りで周り、泣きながら正門の方へ向かう。今後の幸せを守るという意味になる。
カマド	具体的意味	より暖かい場所が身分の高い人や客にすすめられ、近い方を上座、遠い方を下座と分けられていた。
	象徴的意味	竈神、火神 ① 12 月 24 日（竈神祭）、来年の豊作を祈るため竈には杜松の枝や小麦粉などを燃やす。 ②命名の時に竈に向かって五体投地の儀礼がある。 ③産後 1 ヶ月間は、健康のため生後毎日、赤ん坊の額にカマドの 灰をつける

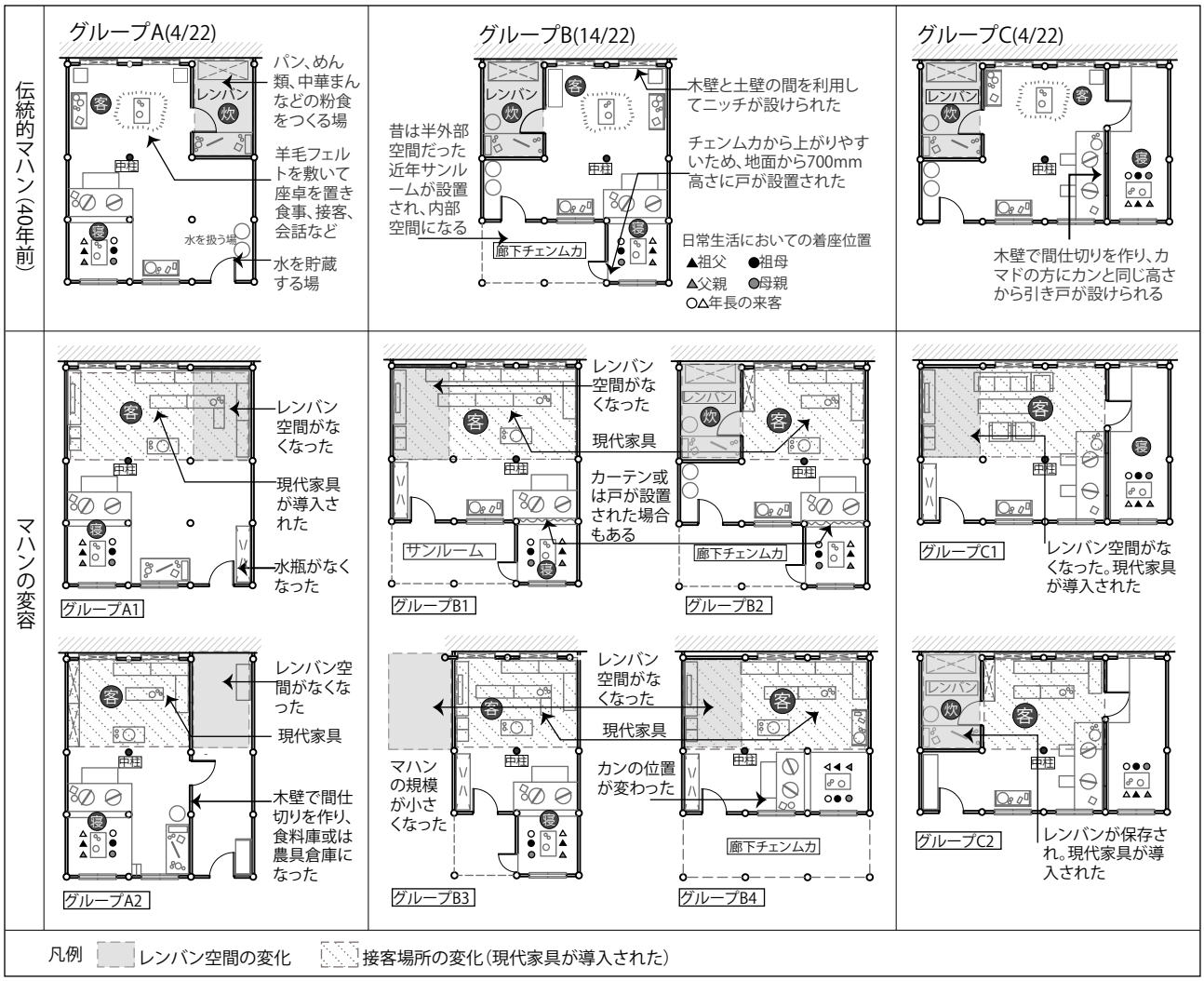

図 6 マハンの伝統的な平面構成と変容

調査住居でマハンの外にリビングルームが設置されたのは4軒、そのうち3軒のマハンには接客家具がななった。また、利用者の人数に合わせて仮設的に利用されるなど状況に応じて寝室で接客することが多く見られる。レンバン空間が残っているのは7軒で、レンバンという炊事場はなくなった傾向があり、機能は厨房或は食料庫に移行していた。カンの上で就寝している住居は6軒、そのうちに1軒のみ年輩者が寝ている。図6より、マハンの規模が縮小している傾向が見られる。

5 まとめ

本研究により、以下のことを明らかになった。

①母屋には、チベット仏教の信仰によって意味づけられる仏間、民間信仰と日常生活によって意味づけられるマハン空間に分けられる。土族はチベット仏教を最も大切な信仰にするため、より私的と聖なる仏間は上階に設置されたのではないかと考えられる。

②経済の発展に伴い、住居規模の拡大、設備の近代化と人口の移動などの理由で、マハンは日常的に使われない傾向にある。現在、生活空間は寝室に集約されている。

③宗教的色彩は伝統的に人生儀礼と年中行事において色濃く見られる。マハンは中柱やカマドなどの重要な設えを持ち、儀礼や行事などの非日常的な活動が行われる場所として残ている。

土族の住居の空間構成の意味をさらに深く理解するためには、同じ地域に居住するチベット族などの民族住まいの共通点の調査が必要と考える。今後の課題としたい。

【注釈】
1) チベット人は伝統的に自らの居住地域をアムド、カム、ウツァンという三つ地域に区分する。それぞれの地域では異なるチベット語方言が話される。
2) レプコンとは現在の青海省黄南チベット族自治州同仁県域を指すチベット語である。この地域で発達してきたチベット仏教美術品と工芸品のタンカ（仏画）など「レプコン芸術」の製作地としてよく知られる。
3) 土語の呼び方による片仮名に翻訳した。
4) 円筒形で、経文が刻まれており、真言を印刷した巻物を重りをつけた筒に納めた、片手で回転させる個人用の小型のものが広く普及している。

【参考文献】
1) 井上えり子,「羌族の住居の空間構成」日本建築学会計画論文集 第552号 1999年8月 pp. 139 ～ 146
2) 井上えり子,「木雅チベット族の住居の空間構成」日本建築学会計画論文 第530号, 2000年4月 pp. 111 ～ 118
3) 谷内麻里子 塩谷壽翁「チベット族の住まいにおける人びとの空間認識と行動から見いだされる空間概念」日本建築学会計画論文集 第667号 2011年9月 pp. 1585 ～ 1592
4) 喬旦加布「チベット・アムド地域における人生儀礼の変化に関する考察」総研大文化科学研究 第13号（2017）pp. 211 ～ 237